

【連載】

日中学術交流の現場から 第十三回

北京からゴジラ同級生俳優、宝田明さんへの手紙(第四便)

山口直樹

(北京日本人学術交流会責任者、市民科学研究室会員)

はじめに

ゴジラを製作した東宝が、創設の時期から中国と深い関係にあったことを第三便で書きました。

しかし、戦後の東宝の怪獣映画からは、中国大陸(支那、満州)が消されていきました。

ゴジラ映画では、日米安保条約を基礎とした地政学的な理由から仮想敵国である中国大陸(支那、満州)が出てきません。



空の怪獣ラドンのポスター([wikipedia](#) より)

私の知る限り例外的には東宝怪獣映画では『空の怪獣ラドン』(1956)到北京が出てきます。この映画では、北

京から電報を打っているシーンが出てきます。また『ゴジラファイナルウォーズ』(2004)では上海に怪獣があらわれるシーンがあります。数少ない例外的なシーンです。

一方、2009年、私が、北京大学のキャンパスのなか中国人の友人から聞かされたところでは、中国共産党のお偉いさんとその家族限定で『空の怪獣ラドン』(1956)の鑑賞会が行われていたことがあったらしいのです。私に情報をタレ込んでくれたその中国人の友人は、中国共産党のお偉いさんの孫だったのです。無論、大多数を占める中国の一般の人たちは、日本の怪獣映画を知りません。戦後日本の怪獣映画からの中国の表象が消されると同時に中国側は、中国側で日本のゴジラ映画が、反核のメッセージを内包しているために映画館で上映するというようなことは回避してきました。だから怪獣映画における日中双方の交流は、断絶してきたのです。

核の問題から切り離されたウルトラシリーズが中国のテレビ局で放送され、中国の若い世代に大きな影響力を持っているのとは対照的です。

本多猪四郎監督や宝田さんのように中国と関係の深い多くの人たちが、制作にかかわっていたにも関わらず、中国のことが、あまりに無視されすぎており、不自然と言わざるを得ません。

この状況を打破しようとした一つの試みが、私の“北京ゴジラ行脚”だったといつてよいだろうと思っています。

1. 池部良と相性の合わなかった宝田明

先日、宝田明事務所でもらった『ゴジラは僕の同期生』(筑摩書房 2018)を読んでいたら東宝の先輩である池部良さんのことが出てきます。池部さんとは十本の共演作があるそうですが、たとえば以下のような部分です。

『雪の炎』は、白川渥の小説が原作でしたが、丸林久信監督でこの作品で僕は、はじめて司葉子と共演したんです。僕と彼女で主役を演じることになった。池部さんとしては、はっきり言って面白くないんですね。東宝でも若いコンビの誕生って大いに宣伝していましたから。「なんだ、あの宝田ってのは？俺の後を追う存在なのか」って。そうすると撮影所のサロンに僕がお昼を食べに行くとね、池部さんが食事をしているんですが、東宝の若手の俳優さんたちが池部さんと一緒に立ち上がって出て行ってしまふ。スタッフはもう、見てわかるんですね。「ああ村八分か」って。それで僕は「なんてけつ穴の小さな奴らだ。俺はソ連の兵隊に撃たれて、死ぬ思いでここまで生きて帰って来たんだ、異民族とも仲良くやって来たんだ、お前らとちがうんだぞ」と思いましたし「なにくそ」という気持ちがムラムラとわいてきましたね。(85頁)

池部さんは宝田さんのことをライバル視し、快く思っていなかったということなのでしょう。

俳優、池部良といえば、東映任侠映画において高倉健とともに最後は敵陣に殴り込む俳優として著名です。中国では『君よ憤怒の河を渡れ』(1976)という映画が、大ヒットしましたが、この映画、検事役の高倉健が主演で、その上司役として池部良氏が出演しています。多くの中国人には、高倉健の上司として認識されています。

この映画は、改革開放期に中国で公開され、爆発的に支持されました。それは高倉健演じる主人公が、無実の罪で追われるという内容であるため、文化大革命で罪をでっちあげられ、糾弾された人々は、高倉健を自らに重ねて熱狂的に支持したのです。だから池部氏は中国では高倉健の上司役として知られています。

高倉健が、なくなった時は、追悼も兼ねて2015年1月18日、第154回北京日本人学術交流会でこの映画の上映会をやり、参加者で共同討論したこともあります。

その時、参加してくれた北京放送(中国国際放送)のアナウンサーだった高橋恵子さんから声がかかり、2019

年9月、東京新宿の工学院大学孔子学院において作家の莫邦富さんと私がパネリストとしてこの映画を論じました。

もし、ここで潰されていたら後の俳優、宝田明はなかったでしょう。

とはいえ宝田さんもまったく孤立無援というわけではありませんでした。たとえば以下のような箇所です。

撮影所の前に飲み屋というか、食事処で「マコト」という店がありましてね。そこに夕方の撮影が終わって、五時から六時までの一時間の休息で僕が入るとママが出てきて、「宝田君、つらいでしょう？みんなはなしているわよ。出る杭は打たれるって。我慢我慢」なんて声をかけてくれるんです。僕も男ですからね「そうなんですよ、つらいんですよ」なんて泣き言は言えない。(85頁)

食事処「マコト」のママは、宝田さんの理解者の一人であり、「宝田君負けちゃだめよ」と応援していたそうですね。当時の撮影所のかかりの人たちが、池部氏らの行動を問題視していたということがわかります。たとえば、経済評論家の佐高信氏は、『田原総一郎への退場勧告』（毎日新聞社2008）で、以下のように述べています。

『文芸春秋』2005年5月号を開けば、こんな人たちが、アベ、アベ、アベの大合唱である。西尾幹二、三宅久之、水谷研治、日下公人、佐々淳行、古森義久、谷沢永一、池部良、児玉清それに田原総一郎。いまこそこれらアベを推した「識者」の「見識」を聞きたいものだ。(126頁)

私は、この安部晋三を支持しアベ、アベ、アベの大合唱をしたものの中に俳優、池部良氏がいることに注目しました。

NHKの番組で安倍晋三のことを指すと思われる「戦争を引き起こす可能性のある政治家に票を入れるべきではない」と発言し、NHKアナウンサーにその発言を止められた宝田さんは、やはりここでも対極にいます。日本軍の中尉として南方で敗戦を迎えた池部良氏とソ連兵に撃たれ死ぬような思いで満州から引き揚げてきて、当時まだ少年だった宝田さんとは、当時の日本社会における位置が、大きく違っていたということもあるでしょう。また、当時の日本社会には、満洲から引き揚げてきたものに対する差別や偏見もあったでしょう。

そうした状況のなかで辛苦をなめて来た宝田さんを支えた人が、また中国とかかわりの深い人なのでした。

『銀幕に愛をこめて—ぼくはゴジラの同期生』（筑摩書房2018）には以下のようにあります。

宝田の東宝ニューフェイス応募のきっかけとなったのは、東京都豊島区池袋の要町にある「中垣スタジオ」である。昔ながらのスタジオ付きの街の写真屋であり、先代なき現在、先代の娘さんの夫である中垣章さんが継いでおられる。先代の中垣欣司(1914年～1989年没)は、屯田兵の二世として北海道に生まれ、東京で写真を学び、故郷に戻って写真店で働きながら、修行を積み、再び上京し、数か所のスタジオで働く。

1941年写真技師として中国北京にわたり、そこで終戦を迎えた。引き揚げ後、池袋西口のマーケットで「中垣スタジオ」を開業。一年ほど後、東口の写真スタジオを借り受け、第十高女(豊島高校)の仕事を請け負うことになり、香川京子のオーディション写真も撮った。(41-42頁)

つまり、東宝を受けてみるように宝田さんにすすめたのは、池袋で写真屋を営む中垣欣司さんであり、中垣さん

がいなければ、宝田さんが東宝に入っていたかどうかはわからなかったということですね。そしてその中垣欣司さんは、1941年から北京に写真技師としてわたっており、中国に縁の深い人だったということです。なぜ2011年3月11日、あの大地震が起こっていた直後に北京にいる私のところに電話をしてくださったのか、これを知ってちょっとわかったような気もするわけです。なお2011年3月10日放送の「徹子の部屋」のゲストは、宝田さんでした。ちょうどこの日の放送を見て3月10日に宝田さんに電話をくれた気仙沼の友人の医師夫妻を翌日の東日本大震災でなくされたということを宝田さんは、2015年放送の徹子の部屋で語っています。

2. 人類への警告としてのゴジラーアメリカにおける宝田明インタビューをめぐって

池田淑子編著『アメリカ人の見たゴジラ、日本人のみたゴジラ』(大阪大学出版会,2019)という本には、カール・ジョセフ・ユーフアートは、第6章「西欧のためのモンスター?それとも日本のもの?—大怪獣の「アイデンティティ」をめぐる映画製作者の視点」という論考が載っています。150頁には、ニューヨーク市で撮った宝田さんと彼が、一緒に写った写真が掲載されています。宝田さんが、ピースサインをしている写真です。

そのなかでカール・ジョセフ・ユーフアートは、「英語のモンスターmonsterの起源は、中世後期の古仏語、monstrum「(重大事が起こる前兆あるいはモンスターであり、)これは警告するのラテン語monereから由来する」(152頁)と書いています。これは重要な指摘です。つまり、モンスターは、人類への警告としてあらわれているということを彼は意識しているということです。『ゴジラ』(1984)のお披露目会である俳優が、「私はゴジラが許せません」と述べたことがあります。ここに決定的にかけているのは、ゴジラは、アメリカの水爆実験によって安住の地を追い出され、自らの意に反してこの世界に現れてしまったという認識です。カール・ジョセフ・ユーフアートの認識は、ゴジラが自らの意に反してこの世界に現れてしまったことをよくとらえているといえます。

この論考のなかで彼は、宝田さんの2014年のインタビューの次の言葉を取り上げています。

破壊者ゴジラが戻ってくるのを防ぐには、人類は次の二つのうち一つを行わなければならない。地球が完全に滅亡するまで核戦争を続け、バカげた争いを続ける。そうすればゴジラの余地はないのである。もうひとつの選択肢は、人類が平和な世界を創造するために団結することだ。世界中があまりに平和であるためにゴジラが介入する余地がないからだ。

どちらの道を進むかは人類の英知にかかっている。観客はどちらがよいのだろうか。

ゴジラを神聖な獣と呼んでも決して誇張にはならないだろう。(174頁)

私は、『市民研通信』第58号・連載第三回「ゴジラ・天皇制・市民科学—令和ブームに抗して」において以下のように書いたことがあります。

ゴジラを倒し、滅ぼせないのは、怪獣だけではない。

ゴジラを分析し、人類の英知である科学技術の粋を結集してつくったメカゴジラもそして自衛隊や国連軍もゴジラを依然として倒すことはできないのである。

この意味でゴジラは、「不滅」の怪獣である。

だが、このゴジラの「不滅」は、理由のない不滅ではない。

高橋敏夫は、『ゴジラが来る夜に』(1993)において「理由なき不滅すなわち存在するというただそれだけのこと

によって自らを不滅の高みにひっぱりあげている「不滅」の存在をわれわれは残念ながら現代史においても依然として所有し続けている。いうまでもなくあの「不滅」の象徴である。この「不滅」の感覚が、われわれの社会を理由もなく浸透しているからであろう。あのおそろべき空疎な、それでいて権威的な言葉「……は永遠に不滅です。」などという言葉が不意に顔を出してしまうのである。だがゴジラの「不滅」はそのような意味の不滅ではない。ゴジラはいわば歴史としての「不滅」である。存在の理由が消えれば、死滅するはずの存在なのである。」と述べている。これは、ゴジラについて書かれた文章のなかでも最も優れた文章のひとつである。

おそらく、この箇所が、宝田さんのインタビューの言葉に関係のある所だと思われます。ゴジラが、あらわれ続けているのは、地球上で核実験が行われ続けているからであり、そのことがゴジラを「不滅」の存在にしているということなのでしょう。

『ゴジラ』(1954)のラストで山根博士が、暗い海面をみつめてつぶやくように言う「あのゴジラが最後のゴジラとは思えない。世界のどこかで水爆実験が行われるならば、またゴジラの種類があらわれてくるかもしれない」という言葉はいまもこの世界に響き続けています。

つまり高橋敏夫氏がいうようにゴジラは「いわば歴史としての「不滅」である。存在の理由が消えれば、死滅するはずの存在」ということなのです。人類が核兵器のみならず、原子力発電所をも廃絶し、平和な世界を創造するならば、ゴジラの介入のしようがなく、ゴジラが存在理由は、消滅することになります。「ゴジラがあらわれたゴジラを殺せ」ではなく「ゴジラがあらわれた人間が変われ」という方向性を示唆してもいます。

ゴジラはもともと最初からそのような理念が含まれている怪獣でした。

『ゴジラ』(1954)制作のプロデューサーの田中友幸氏は、この作品の理念を「人間が文明によって復讐される」理念だとしていました。この理念には田中友幸氏と関西大学で知り合っていた脚本家の馬淵薫氏が、示唆を与えた可能性があることを前回の手紙で書きました。

さらに宝田さんは、ヤン・ステンによる2017年インタビューではゴジラについて次のようにも述べています。

明らかにゴジラは、破壊者であるだけではなかった。ゴジラは海洋で放射能の洗礼を受け、体の中に放射能が蓄積したため、地上にたどり着くまでにそれを放出し始めたのだ。

だからゴジラは、単なる都市を破壊する怪獣ではないのだ。

私は、むしろやつを警笛や忠告を人類に伝える媒介者としてみていた。

これは映画の撮影に従事した時の我々の理解だった。ゴジラは力であり、生き物でもあり、アメリカであるとの同様に原爆でもあったが、日本でもあった。

国民でもあった。恐怖でもあった。繰り返しになるが、姿を変えるものであり、グローバルな人類そのものだったのである。(171頁)

ここでは、ゴジラが「人類への警告」であるとともにゴジラというアイコンの多義性について述べられています。中国大陸をのぞく世界中でゴジラが、よく知られ、支持されている理由のひとつが述べられているとあっていいでしょう。

3. 満洲・本多猪四郎・宝田明

『初代ゴジラ研究読本』(洋泉社2014)に収録されている1990年に行われた坂野義光監督と本多猪四郎監督の対談があります。そのなかで本多監督は次のように言っています。

僕はP・C・L映画製作所には行って1年間ぐらいやって、次の時にはもう戦争、第一連隊って今の防衛庁があるところに入りました。

戦争がああなるとは思っていませんでしたからね。軍隊生活はできるだけ少なくしようと思って、それであの当時だと1年半勤めれば、出てくると予備役、後備役っていうものが少なくて済んだんで、その計算でいったところが、2・26事件にぶつかったわけです。それから始まって満洲に行き。それから途中で帰ってきて1年もないうちにまた招集。招集2回だって通算すると結局足掛け8年ですかね。(53頁)

当時3、4歳ぐらいの宝田さんがいた「満洲国」に本多監督が兵士として赴いていたというのも不思議な縁を感じさせます。本多監督が中国人の庶民を見たのは、おそらくこの時が初めてだったでしょう。

これに関連してハーバード大学の日本研究者、アンドリュー・ゴードンは、『日本の200年』(みすず書房,2006)で以下のように書いています。

満洲の占領を力づくで正当化する必要は、ほとんどなかった。

大半の日本の庶民は、もちろんエリートも1931-1932における事態の進展を手放して歓迎した。新聞は日本軍の前進を熱狂的に伝えた。

ニュース映画とラジオ映画は、競い合って最新の戦況をセンセーショナルに報じた。かつての左翼は見解を変え、満洲の占領は、失業を減らし、国民全体に恩恵をもたらすことを約束しているものであって、資本家的帝国主義的な侵略行為ではない、と主張した。

日本帝国が満洲国という輝かしい「王冠」を手に入れたことを祝い称える、新しい歌謡曲や歌舞伎の新作、さらには新しいレストランのメニューさえ登場した。(401頁)

「満洲国」が誕生するきっかけになった満州事変は、中国では9・18事変というわけですが、これは関東軍の河本大作や石原莞爾らが首謀してやった自作自演の出来事でした。つまり1931年9月18日夜、関東軍が、奉天(現在の瀋陽)郊外の満鉄を爆破し、それを中国の軍閥がやったように見せかけ「暴支膺懲」(暴虐な支那を懲らしめる)という世論を日本の国内で高めていったのです。だから、「満洲国」をたたえるニュース映画とラジオ映画を日本の民衆は疑うこともなく、受け入れていました。「お上」からの情報を疑うことなく、鵜呑みにして信じ込んでしまう日本の民衆の悪い癖が、ここにでています。

これに加えて「満蒙は日本の生命線である。」というスローガンは、松岡洋右が、1931年1月23日の衆議院本会議で浜口内閣の外相幣原喜重郎を痛烈に批判しているときに使われた言葉ですが、当時の日本の民衆の心をとらえていました。松岡洋右は、以下のような演説を行っていました。

満蒙問題についてお尋ねします。満州問題は、私は我が国の存亡にかかわる問題である。わが国民の生命線である、と考えておる。国防上にも亦経済的にも左様に考えておるのであります。私らの見るところでは、満蒙問題というものは、ただ20万人の日本人がおるからとか、鉄道を持っておるからとかいうことが満蒙問題のすべてではない、と考えておる。(拍手)これは、実に我が国の生命線であると、かように承知している。

松岡のこの演説に議場は、騒然となり、幣原が答弁できぬまま、議会は翌日に延期されたといえます。松岡がこのとき使った「生命線」という言葉は、強烈な印象を日本の民衆の心に与えていました。それまではるか遠い地の出来事であった「満蒙問題」を国民の生死にかかわるものとして、多くの人々に印象づけたのでした。こうした言葉の魔術とでもいうもので日本の民衆は積極的に「満州国」の建国を支持していったのでした。

こういうところは、日本の民衆より中国の民衆のほうが、優れていると思えます。

中国の民衆は日本の民衆ほど「お上」からの情報を鵜呑みにして信じ込んだりはしないからです。この事例から学ぶべきことは、「信じる者は救われない」「信じることよりも疑うことを」ということのほうであるように思われます。

そして、ここでゴードンが言っている「見解を変えた左翼」とは例えば、社会大衆党のことです。日本では、満州事変の直前の1931年7月に労農党・全国大衆党・社会民衆党合同賛成派が合同し、全国労農大衆党が結成されました。これがきっかけとして、さらに1932年7月24日に全国労農大衆党と社会民衆党が合同して、社会大衆党が結成されました。戦後は社会党右派に連なる系譜です。当時の立憲政友会と立憲政友党に対する第三極として期待されていました。アンドリュー・ゴードンは先ほどのくだりに続けて以下のように書いています。

社会大衆党は、既存政党と提携するのではなく、支配的な軍部に接近した。軍部と接近したのは、たがいに資本主義に対する反感と既成政党の「利己的」な利益追求に対する反感を共有していたことが理由だった。

社会大衆党は、家賃の抑制・電気・ガス料金の引き下げを柱とする地方改革、保険、年金、労働者の権利擁護のための法制定などの国レベルでの措置を「民衆富んで国防全し」というスローガンのもとに要求した。

社会大衆党は、日本が満州を支配すること、やがては中国全体を支配することは西欧に対する民族自決の大義にかなったことだと主張を受け入れたのである。(418頁)

実際、社会大衆党は陸軍統制派・革新官僚に迎合・接近していました。指導者の一人である麻生久は1934年「陸軍パンフレット」を支持していました。1937年の日中戦争勃発を受けて、「国体の本義」を支持する新綱領を制定し、1938年の党大会では新建設大綱が決定され、全体主義を原則としていました。1940年には大政翼賛会へとなだれ込んでいきます。

特にここで興味深く思えるのが、「家賃の抑制・電気・ガス料金の引き下げを柱とする地方改革、保険、年金、労働者の権利擁護のための法制定」を求めながら陸軍に接近し、「満州」や中国を支配することを肯定していたところです。

2023年の岸田政権において防衛費2倍にするための増税が、なされようとし、テレビで人気のタレントが、自衛隊を称賛する発言するのを見ていると私は、懸念を感じざるを得ないのです。

この自衛隊に1954年の登場以降、一貫して闘ってきたのは、ゴジラに他なりませんでした。

山本義隆氏は、『私の1960年代』(金曜日,2015)において科学史サイドから

1931年に前述の桜井錠二や政治学者で東大総長の小野塚喜平次らの「学術の研究は国家興隆の基調にして又国威宣揚の要素」であるという訴えに基づき、翌年に内閣総理大臣を会長とする日本学術振興会が、発足しています。その活動は1933年から始まりますが、それは不況からの脱出と国の富強化を目指すもので、満州事変のもとの工業生産力の向上と、そのための研究の統制による能率化、近代化を目的としたものです。こうして文部

省の研究費はそれ以前に比べて一桁増加し、戦前の理工系ブームは始まりました。(190頁)

という指摘を行っています。日本の学術の近代化も戦争の遂行と密接な関係をもちながら進行していたということがうかがえます。また、同書で山本氏は、日本の戦争や植民地に関して以下のようにも述べています。

社会科学や人文科学の研究者は、戦時下で学問研究の自由の抑圧を経験した人が少なくありませんが、工学部や理学部の教授や研究者たちにとって、戦争中は我が世の春だったのです。(199頁)

戦時下の国策科学はもちろん軍事偏重というより、もっとあからさまに軍事優先の科学技術ですが、同時にそれが植民地や占領地の軍事支配の上に成り立っていたことを忘れてはなりません。(201頁)

満洲における満鉄中央試験所や大陸科学院といった科学研究機関もまた軍事研究と密接な関係を持っていました。科学政策が国策として組み込まれているが故に予算規模もまたこれらの研究機関には、国家予算規模の予算がつき、そこにいた科学者たちは、とりわけ1940年代前半においては、我が世の春を謳歌していたのでした。



9・18 歴史博物館（瀋陽郊外にて）満鉄が爆破された場所に巨大なモニュメントとして 9・18 歴史博物館が建てられている。

<https://4travel.jp/travelogue/10956087> より

とはいえこの科学者たちの春はそれほど長くは続きませんでした。

1945年に日本が、敗戦を迎え、ソ連軍が満洲になだれ込んでくるからです。そのソ連軍がひどかったのは、宝田さんが経験された通りです。「満州国」は絶対に崩壊しない」そうっていた関東軍は、ひそかに自分の家族だけを内地に返し、満洲の日本人民衆の生命と財産を守らず、置き去りにして姿を消していました。関東軍のこの無責任な姿勢は「原子力発電所は絶対に安全だ」と言いながら、ひとたび事故が起これば、そこに住む住民を置き去りにして、誰一人として責任を取らない者たちとなんと酷似していることでしょうか。

4. 満洲・沖縄・ウルトラシリーズ

宝田さんは、2020年7月25日公開の映画『ドキュメンタリー沖縄戦 知られざる悲しみの記憶』のナレーションをされています。この映画に対するコメントで「胸が痛いというか、のどが締め付けられるかんじがしたんだね。つい嗚咽が漏れてしまう。日本は沖縄を捨て、防波堤みたいにおもっていたんでしょね」という感想を述べていました。これは満洲から引き揚げて来た宝田さんにとっては、他人事とは思えなかったのではないかと私には思えます。

というのも、満洲において軍隊である関東軍は、自国民の生命と財産を守りませんでしたし、沖縄においては、生命と財産を守るどころか日本軍が、沖縄の人々を集団自決に追い込み生命を奪ってましたからです。満洲と沖縄の事例は、軍隊が自国民の生命と財産を守らない典型的な事例のひとつでしょう。現代中国においても人民解放軍は、1989年の天安門事件の時、民衆に銃をむけて発砲していました。

中国でゴジラ以上に影響力を持っているウルトラシリーズは、完全に中国で日本文化のひとつとして定着しています。ウルトラシリーズの基本的なコンセプトを創ったのは沖縄に由来を持つ脚本家の金城哲夫でした。中国人の青年たちにそのことを伝えたとき彼らは驚いていましたが、沖縄への関心の持ち方は、日本の本土の青年以上のものがあると感じました。

このウルトラシリーズの『ウルトラマン』（1966）でウルトラマンの中に入り、『ウルトラセブン』（1968）においてアマギ隊員を演じた古谷敏氏は、その著書『ウルトラマンになった男』（小学館、2009年）においても「俳優としての目標を宝田さんにおいていた」と述べています。古谷氏は、身長が181cmと宝田さんと同様の長身で宝田さんを目標においていたことは、わかるような気がしました。

また宝田さんと会ってからかなり後になってですが、ウルトラセブンでアンヌ隊員を演じた女優、ひし美百合子さんが、著書『万華鏡の女、女優ひし美ゆり子』（ちくま書房、2020）で「自分の芸名を宝田明さんが、考案したことがあった」と述べていることに気が付きました。その芸名は採用されなかったようですが、ここに宝田さんが出てくるとは思いませんでした。彼女は『ゴジラ対ガイガン』（1972）への出演経験もあります。

ウルトラシリーズには、ゴジラ映画の制作にかかわった人たちがたくさん参加していますが、こういうところにも宝田さんの影響を確認することができるのです。

私は、北京で『ウルトラマンコスモス』（2001～2002）で佐原司令官を演じた俳優、須藤正裕さんに会うことになりませんが、彼もまた187cmの長身で中国語のできる本格派俳優です。須藤氏は北京で「ウルトラマンコスモスの佐原司令官から中国の抗日ドラマの日本軍の司令官になった」とよく冗談を言っていました。ウルトラマンをテーマに北京日本人学術交流会を行ったときは、中国人の青年たちがゲストの須藤さんにサインを求めると一幕もありました。中国でウルトラシリーズが人気を集めていることがうかがえます。

この佐原司令官の役名の由来は、『ウルトラQ』（1966）で万城目淳を演じた佐原健二氏からとられているそうです。実は佐原健二氏の本名が、加藤正好で宝田さんと東宝の同期だったということが宝田明『ニッポンゴジラ黄金伝説』（扶桑社、1998）に書かれています。佐原健二氏の書いた著書『素晴らしき特撮人生』（小学

館,2005)もまた宝田さんの『ニッポンゴジラ黄金伝説』と同様に日本の特撮映画史において貴重な資料になることは、間違いないでしょう。

おわりに—宝田明と横尾忠則

2016年7月2日、横尾忠則氏は日記『千夜一夜日記』(日本経済新聞出版,2016)にこう書きつけていました。

桂花の店内で宝田明さんをみつけ挨拶にと思ったけれど、司葉子さん、星由里子さんと一緒だったので控える。70年頃連続テレビドラマ『新平四郎危機一髪』(宝田明主演)にレギュラー出演していた縁あり。

『新平四郎危機一髪』(宝田明主演)での横尾さんとの共演は、知りませんでしたね。横尾さんが書いているのを読まなければ見逃していたところでした。横尾氏は50年近く日記を書き続けています。古今東西を見渡してもこんな芸術家は、稀でしょう。

このドラマの撮影中に宝田さんは大きな怪我をしたのでしたね。

横尾氏は世界的に著名な芸術家ですが、実は私の中学、高校の先輩にあたる人です。おそらく映画の街、成城に居を構えておられるので、こういう場面にいきあたったのでしょう。実は『千夜一夜日記』(日本経済新聞出版,2016)には、ゴジラと寅さんの記述が、やたらと出てきます。この二つは、日本人の心に住み着いているといっても過言ではない存在です。横尾氏が、西脇高校を卒業する1955年のクラスの寄せ書き(『横尾少年—横尾忠則昭和少年時代』(角川書店,1995)118頁)には、「ゴジラ表はる」という記述があります。私の生まれ故郷である兵庫県の山奥の田舎町の西脇市にまでゴジラは、インパクトを及ぼしていたのだということが見て取れます。

横尾氏の画家としての作風は、シュールリアリズムに大きく影響を受けたものです。シュールリアリズムは、普通、超現実主義と日本語で訳されますが、怪獣とは、非現実的な存在というよりむしろ超現実的な存在と考えるべきだろうと思います。(続)

市民科学研究室の活動は皆様からのご支援で成り立っています。『市民研通信』の記事論文の執筆や発行も同様です。もしこの記事や論文に興味深いと感じていただけるのであれば、ぜひ以下のサイトからワンコイン(100円)でのカンパをお願いします。小さな力が集まって世の中を変えていく確かな力となる—そんな営みの一歩だと思っていただければありがたいです。

[ワンコインカンパ](#)

←ここをクリック(市民研の支払いサイトに繋がります)